

景天葉ヨリ細長ク薄シテ、頭ニ鋸齒アリ、夏月梢ニ花ヲ開ク、佛甲草スラグサノ花ノ如シ、插シテ能活ス、コレ救荒本草ノ費菜ナリ、一種紫背ノ景天アリ、形狀微ク小ニシテ、葉背深紫色ニシテ美ナリ、又一種木曾ノ産ニ、小葉ノ者アリ、高サ五六寸、葉ノ大サ五六分、濶サ三分許、キンギョサウノ葉ニ能ク似タリ、

〔剪花翁傳五月、開花〕麒麟艸 花の色黄也、形乙切艸に似て英集て咲也、開花五月上旬より六月迄

咲也、方日向されど莖短かし、又半陰に植れば、高一尺ばかりになれど、莖和らかなり、地土えらばず、肥沃小便、冬一二度、春芽出し前に四五度澆ぐべし、分株冬よし、略中

辨慶艸 花の色白く微紅を含めり、形も至て少さく一房をなせり、開花五月より六月さかもて八月初あり、方日向地乾、土えらばず、肥沃小便、株春彼岸掘出して、古株を去て新芽を分植べし、すこし旧を歴て三分交りの小便をそ、ぐべし、長七八寸にもなる頃、巢蟲生ずること至てはやしよく心を配りて早朝に取捨べし、或は木灰汁、或は煙艸の葉汁などそ、ぐもよし、且彌地には巢蟲も多く生じ、株も瘦て育ちがたし、さて花枝の凋みし物、屋上に在て炎天に當るに、瓦上にておのづから芽を生じ、白根をあらはせり、いとつよきもの也、されば辨慶艸の名うべなり、此葉は蚕豆まめの葉に同じく、もみて吹ばふくる、ものゆへに兒女子の翫にせることあり、必弄しむることなかれ、若砂糖と合し嘗ば、失命となん恐るべし、

〔閑窓自語〕みせばやといふ草名語

故民部卿入道爲村卿かたられしは、今世にみせばやといへるくさ鎮火の種をうるもてあそぶ、これはかの卿の父、大納言爲久卿の和歌の門弟に、吉野山の法師にてあなるが、奥山にて見侍りしく、さて、和歌をそへて贈りし、そのうたの句に、君にみせばやとの詞あり、これによりて見せばやとなづけおこよし、爲村卿の返事ありしを、たしかにみられけるとなむ、